

令和 3 年 6 月 20 日現在

機関番号：22302

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2020

課題番号：18K02066

研究課題名(和文) 未来の剥奪：貧困の生活-文脈の縦断的理解を通して

研究課題名(英文) the poverty research focusing on <life-context> through lifelong development

研究代表者

宮内 洋 (MIYAUCHI, Hiroshi)

群馬県立女子大学・文学部・教授

研究者番号：30337084

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：貧困研究における生活-文脈の理解の問題に焦点を当て、子ども期・青年期・老年期という三つの発達段階に区分し、本研究の共同研究者とともに、各地域における各段階における貧困の実態を解明した。具体的には、私たち研究グループは、参与観察を中心とした地道なフィールドワークによって、現代日本社会の生涯発達における各段階の貧困の実態の理解に努め、その得られた知見をもとに、私たち研究グループにおいて詳細な検討をおこなった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究においては、研究代表者を含む4名の共同研究チームによって、子ども期、青年期、老年期の貧困の状態を国内の幾つもの地域で調査をおこなった。その成果は、特に以下のシンポジウムにおいて結実した。まず、2019年9月17日に愛知県立大学で開催されたシンポジウム「ヤンキーと教育：生活-文脈から考える」(司会：松宮朝、話題提供者：知念渉・打越正行、指定討論者：櫻村愛子・宮内洋)と、2020年9月3日に愛知県立大学からZoomで配信されたシンポジウム「女性ホームレスの排除：生活-文脈から考える」(司会：打越正行、基調講演：丸山里美、対談者：宮内洋)である。

研究成果の概要(英文)：Focusing on the problem of understanding "life-context" in poverty research, it is divided into three developmental stages, "childhood, adolescence, and old age", and together with the collaborators of this research, at each stage in each region. The actual situation of poverty was clarified. Specifically, our research group strives to understand the actual situation of poverty at each stage in the lifelong development of modern Japanese society through steady fieldwork centered on participant observation, and based on the knowledge obtained. , We conducted a detailed study in our research group.

研究分野：臨床発達心理学・社会学

キーワード：貧困 生活-文脈 フィールドワーク 公営住宅

1. 研究開始当初の背景

本研究の研究代表者である宮内洋は、日本発達心理学会の学会誌である『発達心理学研究』編集委員会から依頼され、同誌に「貧困と排除の発達心理学序説」(宮内 2012)を発表した。ここでは、かつて北海道大学教育学部における学際的研究グループによって進められていた「貧困と子ども」に関する研究の一部を紹介しながら、歴史学やルポルタージュの知見も用いて、生涯発達と貧困との関係についての考察をおこなった。具体的には、人間の発達における各ステージのうち、誕生から児童期まで(胎児期、新生児・乳児期、幼児期、児童期)に限定し、この各ステージにおいて、貧困が各々の子どもの発達にどのようにかかわっている可能性があるのかについて、生活環境を中心にして考察をおこなった。

ここで取り上げた北海道大学教育学部における学際的研究グループの取り組み、すなわち発達心理学者の三宅和夫を中心とした貧困に関する研究は、教育社会学者の苅谷剛彦も再評価しているが、残念ながら、少なくとも発達心理学の領域では引き継がれているとは言い難い。生涯発達を視野に入れた実証的な貧困研究が今後、発達心理学以外の領域についてもより一層求められると考え、宮内を研究代表者として、教育社会学と地域社会学領域で活躍する社会学者とチームを組み、挑戦的萌芽研究に応募した。幸いなことに、挑戦的萌芽研究(平成 25~27 年度)「生涯発達から見る 貧困化のプロセス」は社会学領域で採択され、共同研究を続けることができた。この共同研究において、今回申請する本研究とほぼ同一メンバーである私たち研究グループは、先行研究に対して「貧困調査のクリティーク」をおこなうことによって、いくつかの発見をおこなった。上記の宮内による「貧困研究とトラウマ」もまたその成果の一つである。その中の重要な成果は端的に一言でまとめてしまえば、かつての貧困調査研究における生活・文脈理解の脆弱性と言える。そこで、私たち研究グループは、貧困状態の生活・文脈理解を第一の目的に掲げて、さらに3年間にわたる共同研究に取り組むことにしたのである。

2. 研究の目的

本研究の第一の目的は、日本国内各地における貧困の実態の理解にある。先の挑戦的萌芽研究(平成 25~27 年度)「生涯発達から見る 貧困化のプロセス」の研究成果の一つとして、これまでの貧困調査研究における先行研究を再検討した結果、それらの「貧困」の理解が、各研究者自らの生活に基づいた価値観からの「道徳的断罪」と言えるような一方的な決めつけとしか思えないものが少なくないと気づいた。少なくとも、本研究の研究代表者である宮内を中心とした共同研究で強調した(特に、宮内洋・松宮朝・新藤慶・石岡丈昇・打越正行「新たな貧困調査の構想のために-日本国内の貧困研究の再検討から-」(宮内ほか 2014))、貧困調査における調査者による自らの生活を振り返るセンシティブなりフレキシビリティなどは多くの社会学領域の先行研究にはわずかにしか見られなかった。まずは、「貧困」を調べる側が「道徳的断罪」などを決してしてはならず、その問題を避けて実態を解明するために、貧困状態の生活・文脈の理解が第一に求められる。

この点について、進展が目覚ましい貧困研究であるが、阿部彩の研究成果をはじめとして、日本国内における相対的貧困の拡大等は、マクロなデータによって示されている。一方で、いくら質的な調査を重ねられても、上記の生活・文脈の理解の問題がつきまとっている。それらを踏まえて、子ども期・青年期・老年期という三つの発達段階に区分し、本研究の共同研究者たちとともに、各地域における各段階における貧困の実態を解明する。具体的には、隔靴搔痒の聞き取りではなく、参与観察によって生活・文脈の理解に取り組む。

生活・文脈とは、本研究の研究代表者である宮内が2008年に無藤隆・麻生武編『質的心理学講座第1巻 育ちと学びの生成』(東京大学出版会)において発表した「生活・文脈主義の質的心理学」で初めて提起した独自のアイデアである。端的に述べると、生活・文脈とは、「私たちは文脈に依存しながら、やりとりを理解して」おり、「その文脈は自らの生活(これまでの、そしていまの生活)に密接に繋がって」おり、その生活に基づく文脈(宮内 2008, 194 頁)ということになる。まずは、このような生活・文脈の愚直な理解から出発しようとするのが、本研究である。換言するならば、貧困の実態の「外在的理解」ではなく、「内在的理解」の探究である。

私たち研究グループは、参与観察を中心とした地道なフィールドワークによって、現代日本社会の生涯発達における各段階の貧困の実態の理解に努め、その得られた知見をもとに私たち研究グループにおいて詳細な検討をおこなう。このプロセスを何度も愚直に繰り返すことによって、より精緻な知見を資料として残すことができるだろう。

3. 研究の方法

本研究の独自性にもかかわるが、各メンバーによるフィールドワークが基本である。職人芸などと揶揄されるフィールドワークだけではなく、メンバー全員による研究会を定期的におこなう【各自のフィールドワーク 研究会における議論と振り返り 各自のフィールドワーク 研究会における議論と振り返り …】というサイクルによって、本研究を進めていく。このよう

なサイクルを繰り返すことによって、各自のフィールドワークのブラックボックス化を避けることができるだろう。すでに互いの生活・文脈を理解し合う本研究のメンバーだからこそ、各々のフィールドワークにおける様々な文脈までもが理解が可能となり、表面的ではなく、かなり深い議論をおこなうことができる。

各自の具体的な研究計画役割分担および主なフィールドは以下の通りである。

宮内洋：研究統括、子どもの貧困に関する生活・文脈理解

宮内はこれまで沖縄県離島部において「生活・文脈理解型フィールドワーク」という独自の手法を編み出し、独自に研究を続けてきたが、本研究においてもその手法を用いて、子どもを中心としたフィールドワークをおこなう。また、宮内が生息する群馬県においては、子ども期のみならず、青年期と老年期における公営住宅等でのフィールドワークにもまた従事し、他のメンバーによっておこなわれるフィールドワークによる知見との比較をおこない、代表者として統括、さらには臨床発達心理士および公認心理師として、本研究グループにおいては臨床的なスーパーバイザー的役割もまた担う。

松宮朝：高齢者の貧困に関する生活・文脈理解

本研究では、相対的に低所得の高齢者が集住し、孤独死に代表される孤立問題が顕著に認められる公営住宅を対象とする。全国の公営住宅の中でも、外国籍世帯の入居比率が1割以上を超え、高齢者を取り巻く複合的な問題が発現している愛知県および群馬県の県営住宅を事例とする。愛知県の県営住宅については、すでに松宮が10年以上自治会活動の参与観察を続けており、生活場面の詳細な実態把握を行う。群馬県の県営住宅については、調査の実績を持つ研究代表者の宮内、研究分担者の新藤の協力のもと、集中的な聞き取り調査を行う。

打越正行：下層若者の生活・文脈理解

都市の下層若者は労働者としては流動的に配置転換され、生活者としては個別化される。他方で、地方沖縄の下層若者は労働者として下層労働（建築業、風俗店経営、違法就労など）に固定化され、生活者としても地元の先輩・後輩関係を基軸に強固なつながりを強いられている。この対照的な事象のメカニズムについて、彼らが縛られる拠点としての地元社会からアプローチし、都市とは異なる地方の下層若者の貧困の生活・文脈理解を目指す。

新藤慶：貧困に対する教師の関わりにおける生活・文脈的理解

貧困家庭に育つ子どもたちは教育達成において不利な状況に陥りやすく、一定の配慮を求められることが明らかにされたが、教師の間には「社会階層で子どもを区別・選別する考え方をもち込むことは適当でない」という考え方が根強い。また、貧困に向き合う教師の存在を明らかにした研究も幾つか見られるが、その多くは教育運動に従事する教師たちを対象としたものであり、一般の教師への広がりは乏しい。そこで本研究では、教師の子どもの貧困認識を生活・文脈の観点から明らかにし、教員養成課程や研修を通じた教師全体の貧困対策における力量や意識の向上を図る。

4. 研究成果

まず、どの研究もそうであろうが、2020年からの新型コロナウイルスによるパンデミック状況によって、対面状況によるフィールドワークもしくは社会調査は、世界的に不可能となってしまった。それはまた2021年現在においても継続している。

しかし、本研究の初年度である2018からの2年間にわたるフィールドワークと社会調査で得られた知見をもとに、本研究の4名のメンバーによる確認と検討を重ねてきた。さらに、ベラーによる『心の習慣』とブルデューらによる『世界の悲惨』の理論的検討もまた進めてきた。

上記の成果は、私たち研究グループによる共著論文「貧困調査のクリティーク(3):『まなざしの地獄』再考」として発表されるとともに、以下の二つのシンポジウムとして社会に還元ができたと自負している。

シンポジウム「ヤンキーと教育：生活・文脈から考える」(企画：生活・文脈理解研究会，司会：松宮朝，話題提供者：知念渉・打越正行，指定討論者：櫻村愛子・宮内洋)，生活・文脈理解研究会主催シンポジウム(愛知県立大学，2019年9月17日)

シンポジウム「女性ホームレスの排除：生活・文脈から考える」(企画：生活・文脈理解研究会，司会：打越正行，基調講演：丸山里美，対談者：宮内洋)，生活・文脈理解研究会主催・東海社会学会共催シンポジウム(愛知県立大学ただしZoomでの配信，2020年9月3日)

以下は、各メンバー毎に記していく。まず、研究代表者の宮内は、上記の成果を指揮するとともに、スーパーバイザー的役割を務めた。また、本研究の成果に基づき、20近くの講演の他に、以下のような一般および高校生を対象とした啓蒙活動も積極的におこなった(については、メンバーの新藤による協力を得た)。特に は高校生からの反響が大きかった。

講演「貧困の基礎的理解と臨床発達心理学的理解」，日本臨床発達心理士会群馬支部資格更新研修会(群馬社会福祉総合センター，2018年5月26日)

講演「子どもの貧困の前に：貧困の基本的理解」，平成30年度子どもの居場所づくり地域コーディネーター養成研修会(群馬県社会福祉総合センター，2018年12月25日)

講演・ワークショップ「困難を抱えた子どもの相談支援のために」，平成30年度子どもの居場所づくり地域コーディネーター養成研修会(群馬県社会福祉総合センター，2018年12月

25日)

講演「大学で学ぶ 貧困 の基礎的理解」, 高校生グローバル人材育成「明石塾」第19期
(群馬県立女子大学, 2020年10月17日)

松宮の「高齢者の貧困に関する 生活 - 文脈 理解」については、下記の2つの調査研究を実施した。

第一に、相対的に低所得の高齢者が集住し、孤独死に代表される孤立問題が顕著に認められる公営住宅、特に西尾市、豊田市の県営住宅の活動への参与観察を中心に、高齢者の生活課題、外国籍住民の地域参加、防災、生活支援にかかわる自治会活動の調査を実施した。研究成果は、松宮(2017, 2018b, 2019a, 2019b, 2020b, 2021a)にまとめている。

第二に、高齢者への実践的なコミュニティ支援にかかわる、高齢者の孤立をめぐる問題、孤立に取り組むコミュニティソーシャルワーク実践にかかわる調査、およびその調査研究の方法論の検討を行った。研究成果は、松宮(2018a, 2019c, 2020a, 2021b)にまとめている。

新藤に関しては、全体での研究成果をもとに、以下の点で具体的な研究に結びつけた。

第一に、外国につながる子どもの研究に結びつけた。本研究では、愛知・群馬の外国人集住地域でのフィールドワークも何度か実施している。そのなかでは、公営住宅での外国人集住の状況の確認や、近隣の日本人住民の受け止め方に関する聞き取り、さらに外国人と日本人との関係づくりを進めるイベントへの参加などを行った。新藤自身は、直接これらをテーマとした研究をまとめることはできなかったが、外国につながる子どもの生活背景をより深く理解するうえで大きな示唆を得た。そのことは、新藤(2019a, 2021)といったような外国につながる子どもの貧困をテーマとする研究を深めることにもつながった。

また第二に、民族的な少数派の困難への教師の対応について、アイヌ民族を対象とした研究を進めた。この点は、新藤(2019b)としてまとめられた。

第三に、生活-文脈 の視点からの調査方法に関する検討を行った。新藤(2017)において、布施鉄治の村落調査から、「資本の論理」に対抗する「生活の論理」を抽出する調査方法の確立を整理し、本研究会でも報告した。一方、今日の地域生活調査の代表的研究である鳥越ほか編(2018)の書評を担当する機会を得た。ここでは、生活に立脚した「小さなコミュニティ」が主題となる一方、そうした動きを生み出す「資本」の影響や、そこからみえるコミュニティ内外の関係などのより深い描出の必要性を指摘した(新藤 2019c)。それは、生活を規定する「文脈」をどのように把握するかという点とも重なる。

さらにこの点を、第四に、産炭地研究につなげた。鳥越らが一つの立脚点としている宮本常一に、宇部・小野田炭坑の元労働者の聞き取り調査があり、その検討を本研究会で行った。ここでは、炭鉱労働者の労働・生活が詳述されるだけでなく、炭鉱経営や納屋制度の状況、女性労働の状況、近隣の農村との関係などの「文脈」が描き出されていた。こうした、炭鉱経営の在り方に起因する炭鉱労働者の階層構造、ジェンダーの視点、炭鉱コミュニティと近隣コミュニティとの関連などの視点を、北海道の尺別炭砒を対象とした事例研究にも反映させた(新藤 2020)。

打越の「下層若者の 生活 - 文脈 理解」については、以下の成果を出した。まず、沖縄でのヤンキーの若者たちが生きる地元社会へのエスノグラフィ調査を実施し、成果をまとめた(2020b, 2020d, 2020e, 2020g)。

特に彼らの強烈な社会関係は沖縄に特有のものであるが、その要因のひとつには製造業の乏しい沖縄の産業構造があることに言及した(2020a)。また彼らが用いる固有の言語(ヤンキーうちなぐち)についてもその社会関係に縛り付けることを指摘した(2020c)。今後はその社会関係を沖縄の建設業の歴史的経緯から分析し、それらの知見をもとに彼らの生きる地元社会についての 生活 - 文脈 理解をさらに深めていく。

それでは最後に、本科学研究費補助金によって活字となった研究成果のみを以下に列挙する。

【宮内洋】

宮内洋・松宮朝・新藤慶・石岡丈昇・打越正行, 2018, 「貧困調査のクリティーク(3): 『まなざしの地獄』再考」, 『北海道大学大学院教育学研究院紀要』131号, 33-54.

宮内洋, 2018, 「『教育心理学』講義における生涯発達の観点の展開」, 『群馬県立女子大学 教職研究』第4号, 1-13.

宮内洋, 2020, 「書評特集『身体にかかわる著書について著者本人が語る』特集にあたって」, 『質的心理学研究』第19号, 231 - 233.

好井裕明・安保博史・宮内洋, 2021, 「国文学会主催シンポジウム記録『自己を物語る - 文学の中の社会、社会の中の文学をライフストーリーから考える - 』」, 『群馬県立女子大学 国文学研究』第41号, 183-217.

【松宮朝】

松宮朝, 2017, 「地域コミュニティにおける排除と公共性」, 金子勇編著『計画化と公共性』ミネルヴァ書房.

- 松宮朝, 2018a, 「地域コミュニティと排除をめぐる調査方法論」, 『人間発達学研究』9:103-110 .
- 松宮朝, 2018b, 「外国籍住民と公営住宅(上)」, 『社会福祉研究』20:21-28 .
- 松宮朝, 2019a, 「外国籍住民と公営住宅(下)」, 『社会福祉研究』21:23-32 .
- 松宮朝, 2019b, 「リーマンショック後の南米系住民の動向と第二世代をめぐる状況」, 是川夕編著『人口問題と移民』明石書店 .
- 松宮朝, 2019c, 「人口が5倍に増えた愛知県長久手市」, 『プレジデントオンライン』
<https://president.jp/articles/-/27809> .
- 松宮朝, 2020a, 「地域実践と地域の共同性をめぐる調査方法論」, 『愛知県立大学教育福祉学部論集』68:57-66 .
- 松宮朝, 2020b, 「外国籍住民の集住と地域コミュニティ」, 『都市住宅学』110:17-22 .
- 松宮朝, 2021a, 「地域コミュニティの実践と地域社会学の方法論(上)」, 『共生の文化研究』15:88-99 .
- 松宮朝, 2021b, 「地域社会と男性の孤立をめぐって」, 『愛知県立大学教育福祉学部論集』69:45-56 .

【新藤慶】

- 新藤慶, 2017, 「布施鉄治の地域研究における調査と方法—村研での発表論文・夕張調査を中心として」, 『村落社会研究ジャーナル』23(2): 25-35 .
- 新藤慶, 2019a, 「外国につながる子どもの貧困と教育」, 佐々木宏・鳥山まどか編『シリーズ子どもの貧困3 教える・学ぶ—教育に何ができるか』明石書店, 105-28 .
- 新藤慶, 2019b, 「アイヌの子どもと教師の関わり—北海道札幌市・むかわ町・新ひだか町・伊達市・白糠町での実態調査から」, 『群馬大学教育学部紀要 人文・社会科学編』68: 141-56 .
- 新藤慶, 2019c, 「鳥越皓之・足立重和・金菱清編『生活環境主義のコミュニティ分析—環境社会学のアプローチ』」, 『社会学評論』70(2): 181-2 .
- 新藤慶, 2020, 「炭鉱コミュニティの『暮らし』—一尺別の地縁の多層性」, 嶋崎尚子・新藤慶・木村至聖・笠原良太・畑山直子『つながり—の戦後史—一尺別炭鉱閉山とその後のドキュメント』青弓社, 104-19 .
- 新藤慶, 2021, 「外国人の子どもを対象とした貧困研究の成果と教育実践上の課題」, 『群馬大学教育実践研究』38: 287-96 .

【打越正行】

- 打越正行, 2020a, 「沖縄のヤンキーの若者と地元—建設業と製造業の違いに着目して」, 日本平和学会編『平和研究(「沖縄問題」の本質)』54号: 71-90 .
- 打越正行, 2020b, 「排除—不安定層の男たち」, 岸政彦・打越正行・上原健太郎・上間陽子編著『地元を生きる—沖縄的共同性の社会学』ナカニシヤ出版, 263-370 .
- 打越正行, 2020c, 「ヤンキー—うちな—ぐちの言語社会学試論」, 沖縄国際大学南島文化研究所編『南島文化』43号, 43-81 .
- 打越正行, 2020d, 「言語が社会生活を制約—ヤンキー—うちな—ぐち」, 『沖縄タイムス「うちなあ見聞録(228号)」』(2020.4.18 朝刊)
- 打越正行, 2020e, 「景気関係なき雇用重要—新型コロナと建設業」, 『沖縄タイムス「うちなあ見聞録(232号)」』(2020.5.16 朝刊)
- 打越正行, 2020f, 「書評『沖縄で新聞記者になる—本土出身記者たちが語る沖縄とジャーナリズム』—沖縄で生きる覚悟の物語」, 琉球新報(2020年5月17日, 朝刊)
- 打越正行, 2020g, 「生活を守るといふ闘い—分断を超えて」, 『沖縄タイムス「うちなあ見聞録(236号)」』(2020.6.20 朝刊)
- 打越正行, 2020h, 「丸山里美『女性ホームレスとして生きる』—調査する執念」, 『現代思想(コロナ時代を生きるための60冊)』青土社, 219-223 .

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計8件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 4件）

1. 著者名 松宮朝	4. 巻 21
2. 論文標題 外国籍住民と公営住宅（下）	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 『社会福祉研究』	6. 最初と最後の頁 23-32
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 松宮朝	4. 巻 68
2. 論文標題 地域実践と地域の共同性をめぐる調査方法論	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 『愛知県立大学教育福祉学部論集』	6. 最初と最後の頁 57-66
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 宮内洋・松宮朝・新藤慶・石岡丈昇・打越正行	4. 巻 131号
2. 論文標題 「貧困調査のクリティーク（3）：『まなざしの地獄』再考」	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 北海道大学大学院教育学研究院紀要	6. 最初と最後の頁 33-54
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.14943/b.edu.131.33	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 宮内洋	4. 巻 3号
2. 論文標題 「特別の支援を必要とする児童・生徒の理解とその支援」	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 群馬県立女子大学 教職研究	6. 最初と最後の頁 1-22
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 宮内洋	4. 巻 4号
2. 論文標題 「『教育心理学』講義における生涯発達の観点の展開」	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 群馬県立女子大学 教職研究	6. 最初と最後の頁 1-13
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 松宮朝	4. 巻 20
2. 論文標題 「外国籍住民と公営住宅(上)」	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 社会福祉研究	6. 最初と最後の頁 21-28
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 打越正行	4. 巻 10
2. 論文標題 「夜から昼にうつる ライフステージの移行にともなうつながりの分化と家族像」	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 東海社会学会年報	6. 最初と最後の頁 87-98
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 打越正行	4. 巻 47-4
2. 論文標題 「ライフコースからの排除 沖縄のヤンキー、建設業の男性と暴力」	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 『現代思想(引退・卒業・定年)』	6. 最初と最後の頁 89-97
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計6件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 宮内洋
2. 発表標題 ヤンキーと教育： 生活 - 文脈 から考える
3. 学会等名 生活 - 文脈 理解研究会シンポジウム（東海社会学会共催）『ヤンキーと教育 生活 - 文脈 から考える』
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 宮内洋
2. 発表標題 生活 - 文脈 主義から “子育て学における三位一体の研究方略” を考える
3. 学会等名 日本子育て学会第11回大会シンポジウム「研究者vsユーザーの二項対立を超えて - 子育て学における三位一体の研究方略を考える - 」
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 松宮朝
2. 発表標題 公営住宅における外国籍住民
3. 学会等名 東海社会学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 打越正行
2. 発表標題 地元から建設現場へ 沖縄のヤンキーの若者の移行過程
3. 学会等名 社会分析学会シンポジウム『若者の移行過程 沖縄から、公営団地から』
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 打越正行
2. 発表標題 しーじゃ・うっとう関係と建設業 沖縄のヤンキーの若者たちへの参与観察から
3. 学会等名 沖縄国際大学南島文化研究所市民講座 / 2019年度協定校間国際学術交流講演会『沖縄と韓国の若者文化』
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 打越正行
2. 発表標題 外部における文化的再生産 沖縄のヤンキーの若者の空間感覚をもとに
3. 学会等名 生活 - 文脈 理解研究会シンポジウム(東海社会学会共催)『ヤンキーと教育 生活 - 文脈 から考える』
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計4件

1. 著者名 駒井 洋、是川 夕編著	4. 発行年 2019年
2. 出版社 明石書店	5. 総ページ数 280
3. 書名 人口問題と移民	

1. 著者名 松本 伊智朗、佐々木 宏、鳥山 まどか編著	4. 発行年 2019年
2. 出版社 明石書店	5. 総ページ数 324
3. 書名 教える・学ぶ 教育に何ができるか(シリーズ・子どもの貧困3)	

1. 著者名 川端浩平・安藤丈将・轡田竜蔵・芦田裕介・打越正行・白石壮一郎・稲津秀樹・大橋史恵	4. 発行年 2018年
2. 出版社 ナカニシヤ出版	5. 総ページ数 197
3. 書名 『サイレント・マジョリティとは誰か フィールドから学ぶ地域社会学』	

1. 著者名 打越正行	4. 発行年 2019年
2. 出版社 筑摩書房	5. 総ページ数 304
3. 書名 『ヤンキーと地元 解体屋、風俗経営者、ヤミ業者になった沖縄の若者たち』	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	松宮 朝 (Matsumiya Ashita) (10322778)	愛知県立大学・教育福祉学部・准教授 (23901)	
研究分担者	新藤 慶 (Shindoh Kei) (80455047)	群馬大学・共同教育学部・准教授 (12301)	
研究分担者	打越 正行 (Uchikoshi Masayuki) (30601801)	和光大学・現代人間学部・講師 (32688)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------